

## 月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-13

「まあ！」とあっけにとられる女杜氏を尻目に、「本気よ」と江戸女は、まるで当然のこのように言い返した。

「すごーい！」

と女杜氏が嬉しがる様を見て、江戸女は、

「Only ten years have passed?」と言ってしまう。

「え、なんですって？」と女杜氏が聞き耳を立てる。

「たった十年で、これまでにしたのね」

江戸女は月見の宴を風物詩に定着させるのに要した時間の短さに胸を打たれたせいで、こぼれ出た言葉を日本語に言い直した。

そんな中であっても、江戸女は振りを脳裏に焼き付けようと、先程から一人の踊り手を目で追っていた。

「真紀さん、踊りの名取りだったりして？いつだったか兄が、小股の切れあがった女が寄席通いするのは珍しくはないけれど、チェスの有段者は中々いないような話しをしていたことを思えば、そうであってもちっともおかしくないわ」

「ヒントはゼロだったのに、ゼロから生まれる情報もあるのね」と女杜氏を諷してから、

「名取なんて、お金で買えるのよ。こう見えても無駄遣いはしない主義です。ところで、チェスとどこで繋がるのかしら？」

江戸女はひょうげた仕草で問い返した。

「私なりの方程式です」

「うまいことおっしゃるわ！きっと、お兄さんの血筋ね。ねえ、その方程式を使わせて頂くと、麻里子さんもチェスを？」

「不正解……二次方程式でないと解けませんから。さっきの掛け合い話で、鼯鼠の噺家は端なくも一致しましたけれど、チェスはまったくの門外漢です。もしそうだったとしたら、真紀さんと合せ鏡に……薄気味悪くないですか？」

「わたしと昌幸さんとは、そうだったのよ」

凜然と言い放つ江戸女に、なぜか女杜氏は嫉妬を禁じえなかった。

真紀は、もう踊りはそっちのけにして、右脳全開で男との追憶に没入していった。

お祭り広場の月下の场景はフェードアウトして、銀座四丁目交差点の時計塔がある和光の建物を俯瞰する夜景にフェードインした。